

フランコフォニーと東欧諸国

La Francophonie et les pays de l'Europe de l'Est

鳥羽美鈴 TOBA Misuzu

Résumé

Les membres de l'Organisation Internationale de la Francophonie (OIF) ont vu leur nombre augmenter jusqu'à 63 lors du 10^e sommet. On a pu également y trouver des pays non-francophones de l'Europe de l'Est. Leur adhésion permet à l'OIF, surtout à la France qui participe comme un des membres fondateurs d'esquiver toute critique de néo-colonialisme. De plus, cette présence justifie et renforce l'idéal de la diversité linguistico-culturelle promu par l'OIF.

Il est évident aussi que l'OIF n'est pas seulement une communauté linguistique. La promotion de l'usage du français est sans aucun doute l'objectif principal de l'OIF. Cependant, les États de l'Europe centrale et orientale ont peu à peu entretenu les attentes politiques qu'ils pourraient avoir vis-à-vis de la Francophonie. Ils voient l'OIF comme un forum international qui visualise leur politique étrangère. Cela avant tout parce que la France, la Belgique et le Luxembourg sont membres de l'UE, et qu'ils participent, ainsi que le Canada, à l'OTAN. Il est aussi possible qu'ils cherchent à atteindre la consolidation de la collaboration régionale.

Mots clefs

la Francophonie, OIF, les pays de l'Europe de l'Est

はじめに

2004年11月26-27日、ブルキナファソの首都ワガドゥグー Ouagadougou で第10回フランコフォニー・サミットが開催された。それまで56メンバーから成ったフランコフォニー国際組織（OIF：l'Organisation Internationale de la Francophonie, 以下OIF）への加盟国・地域数（オブザーバーを含む）は、こ

の時点で63にまで増加した。そこにはフランス語圏ではない東欧諸国も名を連ねるが、OIFにとって東欧諸国の加盟はどのような意味を持つだろうか。また東欧諸国はどのような背景と意図のもとにOIFに接近したのだろうか。

OIFへの参加申請の際には、フランス語の使用状況が審査対象とされることになっており、新規加入を果たした東欧諸国は、組織内においてさらに上位の地位を得るためにフランス語を普及させようと努力し、同時にその姿勢を強くアピールする。しかし、OIFには、フランス語という共通言語によって結束した「社会言語学的共同体」としての面のみならず、「政治的共同体」としての面もあり、フランス語圏世界への参加そののみを彼らの目標とみるべきではないだろう。本稿ではとりわけ後者の面に力点を置いて両者の関係を考察していきたい。

1 OIF からみた東欧加盟の意味

2006年3月現在のメンバー（全63）は、加盟形態、地域ごとに表1と表2のように分類できる。

ここから東欧諸国とOIFとの関係には次の2点の特徴が認められる。第一に、全権を有する加盟国はまだわずかで、多くがオブザーバーの地位にあること。東欧の中でOIFに早期加盟したブルガリア、ルーマニア、モルドバのみが前者の枠内にある。第二に、東欧諸国の参加によって、ヨーロッパ地域のメンバー数はいまやアフリカ地域のそれに匹敵するまでに増加したことである。第10回サミットでOIF事務総長アブドゥ・ディウフ Abdou Diouf は次のように述べた。「私は諸国の新規加盟を喜んでいる。彼らは必ずヨーロッパ大陸でのフランス語の地位とフランコフォン共同体の重要性を強化するであろう」(OIFのホームページ)。

非フランス語圏の東欧諸国が如何にしてOIFに寄与するのか。他のメンバー諸国の多くはフランスあるいはベルギーによる植民地支配の歴史を有し、アジア地域を除くメンバー諸国のほとんどでフランス語は公用語である。また、アフリカのポルトガル語圏であるギニアビサウ、カボベルデ、サントメプリンシペでも、植民地時代、首都ではフランス語が優先的に使用されていた (DENIAU, 2001, p.39)。それに対して、東欧のメンバー諸国にフランスやベルギーの植民地の経験はなく、公用語はハンガリー語、スロバキア語、クロアチア語と多様である。また、ドイツ、ロシアの影響下に長らくあり事情は大きく異なる。

しかしまさにそのために、東欧諸国の加盟はこれまでOIF、とりわけメンバーの一員として加盟するフランスに対してなされてきた新植民地主義という批

判をかわすことを可能にする．さらに，OIF が掲げる言語・文化的多様性の尊重という理念を正当化し強化する．

2 東欧とフランス語

東欧にあって，ルーマニアは第二次世界大戦以前，親独的でファシストの運動も根強かった一方で，文化生活はフランスの影響を強く受け，1920年から1940年までの戦間期，フランス語出版物を東欧諸国の中で最も多く輸入していた国でもあった (ANTOINE (éd.), 1995, pp.618-619)．現在，アングロ・アメリカ文化・経済が重みを増す中において，フランス語を学び，フランコフォニーと関係するかどうかは個人の選択に任されるが，若いルーマニア人の間で，フランス語は，英語に次ぐ第二外国語となっている (BAMBRIDGE (éd.), 2004, p.97)．初等教育 (公立・私立) で約 27 万，中等教育で約 168 万ものフランス語学習者を抱える．

マケドニアにおいてもフランス語は英語に続き，LV1 (第一外国語) として 30%，LV2 (第二外国語) として 42% を占める．但し，ドイツ語がそれに迫りつつある (VALANTIN (éd.), 2005, pp.67-72)．

ポーランドはルーマニアと同様，フランス文化の影響を大いに受け，かつてフランス語圏であったとも言われるが，フランス語は LV1 として 4.9% を占めるに過ぎない (VALANTIN (éd.), 2005, pp.67-72)．一般のポーランド人が知っている外国語の一位は過去の遺産たるロシア語 (43%)，2 位が特に大都会に住む豊かな層の若者たちの中で急激に増加している英語 (35%)，3 位がドイツ語 (29%)，そして 4 位にフランス語 (6%)，5 位がイタリア語 (3%)，6 位スペイン語 (2%) とも報告される (ISP, 2003)．

チェコは，フランコフォニーの日を設けてプラハにフランス語圏諸国の大使や大臣を招き，フランス語教育の促進に取り組んでいるとされる (TÉTU (éd.), 2002, pp.90,92)．しかし，中等教育において，フランス語の学習者数は英語とドイツ語のそれに及ばない．

リトアニアでは LV2 としても，フランス語は英語，ロシア語，ドイツ語に続き 4 位に位置する．他方，東欧に高等学校のレベルでフランス語を併用したバイリンガル教育も存在し，スロバキアに 2 校，チェコに 5 校，ブルガリアに 53 校，ルーマニアには 54 校ある (VALANTIN (éd.), 2005, pp.67-72)．

このようにフランス語の教育・学習状況には，諸国間に大きな差異があると同時に，ルーマニアにおけるフランス語の優位が認められる．その一因としてはルーマニア語とフランス語の言語的類似性が挙げられる．東欧がスラブ語圏

である中、ルーマニアで使われているルーマニア語はフランス語、イタリア語、スペイン語などのロマンス諸語と同じ起源をもつ言語である。しかしまた、フランス語を日常的に使用する「フランス語話者」の比率は、東欧諸国において押しなべて低いのも事実である（表3）。

3 東欧によるOIFの位置づけ

東欧諸国が1993年から2004年にかけてOIFに加盟するようになった背景を探るには、言語・文化的な要素に加えて政治的な要素を考慮に入れる必要がある。ローマ駐在リトアニア大使のニダ・ダルマンタイト Nida DALMANTAITE は明言している。「ベルリンの壁崩壊後、中・東欧諸国は徐々にOIFに政治的期待を抱くようになった。OIFは外交政策を促進させる国際フォーラムとみなされ、この意味で、EU（欧州連合）とNATO（北大西洋条約機構）のメンバー諸国がその最初の目標となったのは明白である」（TÉTU(éd.), 2002, p.91）。

3.1 EU・NATOそしてOIFへの接近

周知のように、91年のソ連のクーデタと解体、ユーゴスラヴィアの民族・地域紛争の泥沼化の中で、中・東欧は、東（ロシア）と南（バルカン紛争）に対する安全保障としてのNATO加盟、民主化・市場化導入による安定と発展のためのEC/EU加盟を強く望んだ（羽場, 2003, p.174）。ここで、EU原加盟国のベルギー、フランス、ルクセンブルク、これにカナダを加えたNATO原加盟国がそのメンバーであるOIFは、EU・NATO加盟という外交政策を実現するための、いわば橋渡しの意味をもつと言える。実際にEU・NATOと、OIFへの参加時期を丹念に追っていくと、両者が絡み合うように進行していく様が窺える（表3）。

1993年2月に欧州協定¹に調印したルーマニアと、同年3月にやはり欧州協定に調印したブルガリアは、同年12月にOIFに加盟して、2004年のNATO加盟と2007年に予定されているEU加盟に備えている格好である。

ポーランドがEUに加盟申請を行ったのは1994年4月であるが、1997年10月にOIFへ参加、その2ヵ月後の12月にはマドリード首脳会議でポーランドはチェコ、ハンガリーとともにNATO新規加盟第一陣の対象国とされた。そして同じ12月に、ルクセンブルク欧州理事会で上記3カ国とのEU加盟交渉の開始が決定されている。1999年3月、3カ国がNATOに正式加盟を果たすが、続いてチェコがこの年の10月にオブザーバーとしてOIFに参加する。

¹ EU加盟を前提とした連合協定。

長年、半鎖国的な社会主義体制をとってきたアルバニアは、マケドニアと共に1999年に準加盟国としてOIFに加盟し、さらに両国はOIF全権メンバーへの地位変更を希望している (TÉTU (éd.), 2002, p. 85, pp. 88-89) . これと併せてEU・NATOへの歩みが進められている .

クロアチアは2003年2月にEUに加盟申請を行い、2004年6月18日、政治的基準を満たしたとして加盟候補国の地位を付与されているが、OIFのオブザーバーとなったのも同年である .

3.2 連帯強化の場としてのOIF

先に、EU・NATO、そしてOIFへの加盟に向けた諸国ごとの動向を概観したが、転じて東欧諸国間の関係に着目するとき、OIF加盟は新たな意味を有するものとして位置づけられ得る .

そもそも東欧における民族の分布は国境とほとんど一致していない . 東欧の諸民族の多くが20世紀初頭までみずからの国家を持たず、オーストリア＝ハンガリー帝国、オスマン・トルコ、ロシアなど当時の列強の支配下にあり、その領内あるいは領外への移動が様々な要因で行われた結果である (伊藤, 2001, pp. 614, 799) .

そのため、EU加盟と同年の2004年にOIFに加盟しているハンガリーでは、EU加盟によりルーマニアをはじめとする東側隣国との国境が厳しく管理され、国境の向こうに住むハンガリー系住民との関係が遮断されるのではないかと懸念された (伊藤, 2001, p. 614, p. 799) . 他方で、2006年現在もEUへの加盟が果たされていないルーマニアとブルガリアは、OIFには1993年に早々と加盟している .

そこで、既存の地域協力機構の枠組みを大きく超えたOIFという国際組織を通して、EUへの加盟・未加盟を問うことなく東欧諸国間の協力関係を築くことが可能になる . すなわち、OIF加盟は西欧諸国のみならず東欧諸国間との連帯強化をも目指したものと言えるであろう .

終わりに

ポーランドのNATO加盟が確実になるのと前後してEU加盟交渉が始まった際に、フランスがそれを支援したのに対して、ドイツはポーランドのEUへの早期加盟に難色を示した . そこには両国の入り組んだ関係がある . ドイツは、EU加盟をめざすポーランドにとってEU内の最大の代弁者であるが、ポーランド側の世論には、ドイツ人による旧ドイツ領の土地の買収などをつうじて「過去」が呼び戻されることへの警戒感がうまれ、ドイツ側には「安い労働力」の

大量流入にたいする恐れが表面化してきたのである（小森田，2001，pp. 198-199）。このように東欧とOIFの関係を見ていくためには西欧のOIF加盟国 主にフランスとの関係のみならず，ロシア，ドイツとの関係もむろん考慮に入れなければならない。

次回のOIFサミットは2006年9月末にルーマニアの首都ブカレストという東欧の地で初めて開催されようとしており，フランコフォニーに関する議論が東欧諸国側からも多く出てくるに違いない。このときの資料をもとに，さらに議論を深めていきたいと考える。

参考文献

- ANTOINE, G. et MARTIN, R. (éds.) (1995), *Histoire de la langue française : 1914-1945*, Paris : CNRS-éditions.
- BAMBRIDGE, T. (éd.) (2004), *HERMÈS 40 : Francophonie et mondialisation*, Paris : CNRS.
- DENIAU, X. (2001), *La francophonie*, Paris : Que sais-je ?.
- 羽場久み子 (2003), 「ヨーロッパ拡大とハンガリーおよび周辺地域マイノリティの民主化」, 日本比較政治学会 (編) 『EUのなかの国民国家』, 東京 : 早稲田大学出版部 .
- 伊藤孝之, 萩原直, 柴宜弘, 直野敦, 南塚信吾 (編) (2001), 『東欧を知る事典』, 東京 : 平凡社.
- 小森田秋夫 (2001), 「ヨーロッパ統合とポーランド」, 宮島喬, 羽場久み子 (編) 『ヨーロッパ統合のゆくえ : 民族・地域・国家』, 東京 : 人文書院 .
- TÉTU, M. (éd.) (2002), *L'Année francophone internationale*, Québec : Université Laval.
- VALANTIN, C. (éd.) (2005), *La Francophonie dans le monde 2004-2005*, Organisation Internationale de la Francophonie, Conseil Consultatif, Paris : Larousse.
- 欧州連合 (EU) <<http://europa.eu.int>> 2006年3月31日.
- 外務省 <<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/eu/keyword.html>> 2006年3月31日.
- フランコフォニー国際組織 (OIF) <<http://www.francophonie.org/secretaire/discours/infos.cfm?num=227>> 2004年12月19日 .

表1: OIFメンバーの加盟形態区分

全権を有する加盟国・地域 (49)
ベルギー, ベナン, <u>ブルガリア</u> , ブルキナファソ, ブルンジ, カンボジア, カメルーン, カナダ, ニューブランズウィック(カナダ), ケベック(カナダ), カボベルデ, 中央アフリカ, ベルギーフランス語共同体, コモロ, コンゴ, コンゴ民主共和国, コートジボワール, ジブチ, ドミニカ国, エジプト, フランス, ガボン, ギニア, ギニアビサウ, 赤道ギニア, ハイチ, ラオス, レバノン, ルクセンブルク, マダガスカル, マリ, モロッコ, モーリシャス, モーリタニア, <u>モルドバ</u> , モナコ, ニジェール, <u>ルーマニア</u> , ルワンダ, セントルシア, サントメプリンシペ, セネガル, セイシェル, スイス, チャド, トーゴ, チュニジア, バヌアツ, ベトナム
準加盟国 (4)
アルバニア, アンドラ, ギリシャ, マケドニア
オブザーバー (10)
<u>アルメニア</u> , <u>オーストリア</u> , <u>クロアチア</u> , <u>リトアニア</u> , <u>グルジア</u> , <u>ハンガリー</u> , <u>ポーランド</u> , <u>スロバキア</u> , <u>スロベニア</u> , <u>チェコ共和国</u>

表2: OIFメンバーの地域区分

中・東欧 (17)
<u>ブルガリア</u> , <u>ルーマニア</u> , <u>モルドバ</u> , <u>ポーランド</u> , <u>アルバニア</u> , <u>マケドニア</u> , <u>リトアニア</u> , <u>スロベニア</u> , <u>チェコ共和国</u> , <u>アンドラ</u> , <u>ギリシャ</u> , <u>アルメニア</u> , <u>オーストリア</u> , <u>クロアチア</u> , <u>グルジア</u> , <u>ハンガリー</u> , <u>スロバキア</u>
西欧 (6)
ベルギー, フランス, ルクセンブルク, モナコ, ベルギーフランス語共同体, スイス
オセアニア (1)
バヌアツ
東南アジア (3)
カンボジア, ラオス, ベトナム
近東 (2)
エジプト, レバノン
北アメリカ (3)
カナダ, ニューブランズウィック, ケベック
カリブと南アメリカ (3)
ドミニカ国, ハイチ, セントルシア
インド洋 (4)
コモロ, マダガスカル, モーリシャス, セイシェル
アフリカ (21)
ベナン, ブルキナファソ, ブルンジ, カメルーン, カボベルデ, 中央アフリカ, コンゴ, コンゴ民主共和国, コートジボワール, ジブチ, ガボン, ギニア, ギニアビサウ, 赤道ギニア, マリ, ニジェール, ルワンダ, サントメプリンシペ, セネガル, チャド, トーゴ
マグレブ (3)
モロッコ, モーリタニア, チュニジア

表3: ヨーロッパ地域OIFメンバーの状況

中・東欧	OIF(ACCT) 加盟年	EU(EC) 加盟年	NATO 加盟年	仏語話者 比率(%)	公用語・国語 (通用語)
ブルガリア	1993		2004	10.0	ブルガリア語
ルーマニア	1993		2004	8.0	ルーマニア語 (ハンガリー語)
モルドバ	1996			25.0	モルダヴィア語 (ロシア語)
ポーランド	1997	2004	1999	3.0	ポーランド語
アルバニア	1999			10.0	アルバニア語
マケドニア	1999			10.0	マケドニア語
リトアニア	1999	2004	2004	1.0	リトアニア語
スロベニア	1999	2004	2004	4.0	スロベニア語
チェコ共和国	1999	2004	1999	2.0	チェコ語
アンドラ	2004				カタルニア語 (スペイン語, ポルトガル語, フランス語)
ギリシャ	2004	1981	1952		ギリシャ語
アルメニア	2004				アルメニア語
オーストリア	2004	1995			ドイツ語
クロアチア	2004				クロアチア語 (セルビア語等)
グルジア	2004				グルジア語
ハンガリー	2004	2004	1999		ハンガリー語
スロバキア	2004	2004	2004	3.0	スロバキア語
西欧					
ベルギー	1970	1952	1949	41.7	フランス語・ オランダ語 (ドイツ語)
フランス	1970	1952	1949	99.8	フランス語
ルクセンブルク	1970	1952	1949	90.0	フランス語・ ドイツ語・ルク センブルク語

鳥羽美鈴 TOBA Misuzu

モナコ	1970			78.1	フランス語
ベルギー・フランス語共同体	1980			95.0	フランス語
スイス	1996			20.4	フランス語・ドイツ語・イタリア語・ロマンシュ語

VALANTIN (éd.) (2005), EU・OIF ホームページ等を参照して筆者作成。なお、フランス語話者比率は2003年当時の統計であり、空欄はデータが得られていないもの

(一橋大学大学院)